

禅院ぜんいんに題だいす

杜と

牧ぼく

舢船こうせん一棹いっとう百分ひゃくぶん空むなし

十載じゅうさいの青春せいしゅん公こうに負おそかず

今日こんにち鬢あは糸いと禅榻ぜんたの畔ほとり

茶煙ちやえん軽かろく颯あがる落花らつかの風かぜ

【作者】杜牧(八〇三〜八五二年)晚唐の詩人、字は牧之。京兆万年(現・陝西省西安)の人。進士になった後、中書舍人となる。杜甫を「老杜」と呼

び、杜牧を「小杜」ともいう。李商隱と共に味わい深い詩風で、歴史や風雅を詠ったことで有名である。

【語釈】*題禅院:禅宗の寺で詩を作る。 *舢船:酒を載せた船。 *百分空:すっかりと飲み乾す。

*十歳:十年間。役人生活の時代で、宴(うたげ)の日々を指す。 *青春:作者が江南で官に任じられていた頃。

*鬢絲:両側の髪の毛に交じった白髪。 *禅榻:禅寺。お寺。 *茶烟:茶を沸かす煙。

【通釈】酒を載せた船の酒を一船分、すっかり飲み乾したこともあった。十年間の青春時代の行跡は、諸兄の期待に背くことがなかったし、(十年間の

青春時代の行跡は、)大酒を飲み、酒器にも恥じることがなかった。今は、白髪混じりの頭となり、禅寺の坐禅用の腰掛けの辺りで。茶を沸かす煙が、花を散らしてしまふ風に、軽やかに揺れ動いている。